
ドラえもんズ

春崎やよい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドラえもんズ

【Nコード】

N1503E

【作者名】

春崎やよい

【あらすじ】

のび太の部屋にいきなり現れたドラえもんズ。ドラえもんズの中に女となってしまった王ドラ。王ドラをめぐっての対決が繰り広げられていくハチャメチャラブコメディ！

恋人になるか？

此処は、21世紀

俺がいる国は、アメリカ

キッドは、今鏡の前に立って自分を見ていた。

紅い帽子に白い服を着て立っている、靴は、茶色いブーツを履いている少年が鏡の前でたたずんでいる。

「なんで、こんなすがたになっちまったんだよ・・・」

キッドは、今人間の姿になってしまった。

なぜ、人間の姿に変化してしまったのは、わからない

此処で、こうしているのもなんだ。ドラえもんのところに行こう

キッドは、四次元ハットからタイムマシンを取り出して、日本に移動した

日本にキッドの仲間、ドラえもんがいるからだ。

練馬区にドラえもん・のび太が住んでいる。

野比家に今現在、ドラえもんズの面々が集まっている。

どういうわけか、みんな此処に集まってきてしまったのだ。

今、此処にいないのは、キッドだけ。たぶん、此処に来るだろうとのび太は、予想していた。

「それにしても、なぜ人間になってしまったのでしょうか？」

王ドラがドラえもんに投げかけた。

ドラえもんも考えているが、それがなぜなのかは、わからないようだ。

引き出しが開かれ、キッドが出てきた。

「のび太、ドラえもんは？」

「此処にいるよ。」

キッドからドラえもんへと視線を移した。のび太の隣には、ドラえもんが座っている

二人の前には、男集団と女の子が一人、ドラえもんの前に座っているキッドは、首をかしげた。

男は、すぐに仲間だという事はわかるが、女なんかいたっけ？

「キッド、どうしましたか？」

首を傾げて自分を見ていることに女の子が、キッドの前まで来て、立ち止まった。

引き出しの中から、体だけをずっと出しているから不思議に思った。

「出てきたらどうですか？」

「ああ、そうだな」

キッドは、引き出しから出てきた。女に向き直り、しゃべりかけた「お前誰だ？」

気になっていたことをキッドから言われて女の子は、泣きそうな顔になった

「ぐすつ・・・酷いですよう・・・キッド・・・」

口調と俺の名前を知っている。という事は・・・

「王ドラか？」

恐る恐るキッドは、問いかけた。キッドが疑問に思いながら王ドラを見つめ

「そう・・・です・・・」

判ってもらえたようで王ドラは、頬を少し赤くさせていた。こうしてみれば、王ドラ可愛いじゃねえか。

キッドは、王ドラの前で片膝を着き、右手を取った。

「王ドラ、可愛いじゃねえか。惚れちゃったぜ！」

キッドは、その右手にチュツと音を立ててキスをした。

その場にいた誰もがひいたのは、手にとれるように判っただろう。

そして、（キッド！ドラミがいるだろうと！）と心の中で、突っ込

むものもいた。

「キッド・・・」

王ドラは、ちょっと違った反応を示した。

おい、おい、王ドラ忘れちまったのか？キッドには、ドラミがいるということ。

ドラえもんズの面々は、思っていたのであった。

王ドラは、さつきよりも頬を赤くさせていた。そして王ドラは、キッドの胸の中に飛び込んだ。

それにマタドロー自身も信じられないような表情をしていた。

俺が女だと間違えたときとキッドに告られているときと全然違っじゃないか！！

突っ込みたがったが、言わなかった

だって、ここで突っ込んだら王ドラに何をされるか分からないから

「王ドラは、お前のじゃないからな」

マタドローがキッドに宣戦布告した。

まるで、お前には絶対渡したくないとでも威嚇しているかのような感じのオーラを纏っている。

「判ってる。でも、王ドラは俺のそばにいて欲しいだけさ」

「俺も一緒にだ。」

こうして、王ドラの取り合いの日々が始まったのであった。

のび太の悩みが一層増えるのであった。

恋人になるか？（後書き）

最初なので、短めですいません。
でも、楽しい話になると想いますので、交互ご期待！

参戦ドラパン！勝つのは、誰？！

その日、のび太と王ドラは、のび太の母、玉子にドラえもんズのことを話した。

しばらく此処に泊めてもらう許可を貰った。

上にかかる前に玉子は、ドラえもんズがいる部屋、のび太の部屋に乗り込んできた。

玉子は、一人ずつ部屋から連れ出して、着せ替えをさせられていたそうだった。

最後に王ドラが着せ替えから戻ってきた。さっきまで、来ていた服と変わっていた。

女の子が着る服をきている。

しかも、玉子が普段着ないような服を王ドラが着ているのを見た。

「王ドラ・・・その服・・・」

のび太が王ドラに話しかけた。

他のみんなは、あっけにと取られてしゃべれないような状態だったから

「この服ですか。玉子さんから貰ったんです。もう着ないからってどうですか？って王ドラは、一回転して見せた

それを見たドラえもんズみんなは、一気に王ドラの虜になったのは言うまでもない

王ドラは、普通の女の子よりも少し小さいくらいで、髪の毛はオレンジで、三つ綱にしている。

目はオレンジできらきらしている。

ちゃんと、胸もあって、Cはあるだろうのサイズだった。

体つきもモデルくらいのナイスバディ？見たいな感じ。

「はあ・・・あ・・・」

ため息をついているものがある。ドラパンだ。明らか今まで、見たこともないような表情をしている。

ドラパンは、王ドラの前に来て、膝まつき王ドラの手を取り、手の

甲にキスを落とした。

「ドラパン・・・？」

王ドラ自身もかなり驚いているようだ。

ドラパンって、こんなことしましたっけ？

キッドとマタドローもごごごとすさまじい効果音を出すくらいの形相でドラパンを見ていた

いつまでも、王ドラの前で膝まついているドラパンをマタドローは、ドラパンの襟首を持ち上げた。

「は・な・れ・ろっ！」

マタドローは、ドラパンを畳の上にくろがした。

我慢の限界だったらしい。

けれど、マタドローは怪力の持ち主、相当の力があつたので、ドラパンは畳に相当な勢いで叩きつけられた。少し、膝小僧が衣服の下で擦り剥けていた。

愛しの王ドラに何をするんだと言わんばかりの目をドラパンに向いている。

ドラパンはため息をついて、マタドローを見た

「手を出さないお前らが悪い。それに私は、王ドラが好きなのだから！」

ドラパンの目は、マタドローとキッドに向けられている挑戦的な目だ。

哀れむようなそんな目ではなく、絶対王ドラを持つていくと

のび太は、ため息をついた。

参戦ドラパン！勝つのは、誰？！（後書き）

ドラパンのキザな台詞を考えるのに手間どってしまった。

キッドとマタドーラ、ドラパンの行く末は？どうなることやら・・・

次回をお楽しみに！！評価お願いします！！！！

平和な朝

此処は、野比家の二階、のび太の部屋。

両親は、今不在中。夕方、電話を貰い親戚に呼ばれ飛び出していった。

夜の今の時間、のび太たちは、ご飯を食べていた、夕飯を食べ終え、お風呂に入って寝ることになった。そのとき、問題が起きた。

「王ドラと一緒に寝たい。」

これは、マタドーラ。

絶対そう思うと思った。

マタドーラ以外みんなそう思った事。それぐらいは、予想は出来ていた。

「王ドラはどうしたい？」

「私は、別にかまいませんよ」

王ドラがそういうので、みんなのび太と同じ部屋で全員で寝ることになった。

もちろん、スモールライトで小さくなって寝ることに

大勢で、そのままごろんと寝るのは、無理があるという事

のび太が朝起きたときには、王ドラがいなかった。何処にいるのかと思いきや、台所にいたから驚いた。

「王ドラ何しているの？」

「料理しているんです。のび太さん、学校でしょう？」

そつえば、そうだ。すっかり忘れていた。

二階では、ドラえもんズが起き出して、騒いでいるのが聞こえていた。それを見かねた王ドラが、のび太を急がせた。

「のび太さん、早く食べてください。みんなが来ると、ゆっくり食べられないですから」

「そうだね」

のび太は、そそくさと椅子に座って朝食を食べ始めた。

王ドラって、料理も上手なんだ。のび太は、食べて初めて分かった。

「美味しいよ。王ドラって、料理も出来るんだね」

「一度作ったことがあったものですから」

自信ないんですけどねって、王ドラは小声で言った。

のび太は、ランドセルを持って学校に行った。

のび太が学校に行っているとき、家でトラブルが起きていた。そのことは、あとで分かる。

マタドールとキッドと王ドールと・・・(前書き)

王ドール人称です。

マタドローラとキッドと王ドラと・・・

のび太君が学校へ行った後、ドラえもんは、ミーちゃんとのデートに出かけ、ドラニコフとドラメッド・ドラリーニヨは、何処へ出掛けました。ドラパンもどこかへ

残った私とマタドローラ、キッドは、部屋にいました。

マタドローラとキッドは、何か話しています。

私は、暇だったので、家事をしていました。玉子がない今、私がすればいいと思ったので、自然とやっていました。

ところがその時、王の後ろにキッドとマタドローラが立っていました。二人の存在に気がついた王は、振り返りました。

「何ですか？」

「暇だから、王ドラ何しているかなって思ってた」

マタドローラが笑みを言う。

「今は、掃除をしていますけど」

状況を見れば、分かることだと思いますけどね。止めていたことを再開しはじめた。

掃除機で部屋を掃除し終わり今度は、トイレ掃除をしようと思いトイレに行こうとしたとき

キッドが王の手首を掴みました。

「何ですか？」

「来いよ」

王は、キッドに手を掴まれたまま、二階にある部屋に連れて行かれました。

一体なんでしょうか？

マタドローラは、部屋を開けて、キッド・私・マタドローラと部屋に入りました。マタドローラは、後ろ手で閉めました。

キッドは、掴んでいた私の手を解いて、押し倒しました。

何をするのかと思いきや、私の服を脱がしてきたのです。

「何をするんですか?!」

「王ドラ悪いな。けど、我慢の限界なんだよ」

キッド・マタドローは、両者ともに私の体をまさぐってきました。

初めての私は、戸惑うばかりでどうしたら言いの分からず、流されるままにされていました。

それを感じてしまい、悦んでいました。

マタドールとキッドと王ドラと・・・（後書き）

悪戯・・・

キッドとマタドールが王ドラを押し倒し、やってしまう。

予想できた方いましたら、教えてください。

想像通りでしたか？

評価などがありましたら、お願いしますね。何でもいいので
それではまた

仲間

マタドロー・・・キッド・・・あなたたちは、こんな事がしたかったのですか？

私の気も知らないで・・・酷いですよ・・・

「ああ・・・」

感じてしまうなんて・・・

私の体が穢れていく・・・うう・・・ん・・・やめて欲しい・・・

行為がやんで、私の体は、動きません。

「どうしてくれるんですか？体が動かないじゃないですか！」

「ごめん」

謝ればいいというわけじゃない

「許しませんからね」

私は、暫く横になっていました。

ドラえもんたちが帰ってきて、どうしたのって聞かれました。

此処は誤魔化さないといけませんね。

「キッドとマタドローと一緒に遊んでいましたら、一本背負いをされまして、動けなんです。暫くすれば、動けるようになると思いますから」

それを聞いたドラリーニョは、「そうなんだ」と納得しました。

「本当に大丈夫？」

ドラえもん、あなたは本当に心配性ですね。

私は、最高の笑顔を浮かべて「大丈夫ですよ」とドラえもんに言いました。

玄関の開く音が聞こえてきました。のび太さんが帰って来たんですね。

「ただいま」

のび太さんは、二階に着て私の寝ている姿を見るなり、駆け寄ってきました。

みんな、ありがとうございます。

「王ドラどうしたの？」

それを聞いたドラえもんが追うドラの状況を説明した。

さっき私が言ったことをドラえもんがのび太さんに言ってくれた。

助かります。

私はそのまま、寝ることにしました。今日は、もう疲れました。

仲間（後書き）

前作に引き続き今回も王ドラの一人称になりました。

どうしたでしょうか？描写のほう、伝わりましたか？変なところありませんでした？

評価欄に書いてくれると助かります。

評価楽しみに待っています。

仲間くドラパン saidく

帰ってきたら、王ドラが畳の上で横になっていた。

一体何があつたのだろうか？

横たわっている王ドラを見ると、彼の前で俯いて座っている影が二人いるのを見つけた。

マタドーラとキッドは正座をしていて申し訳ないといったような顔をしている。

そういうことか・・・

ドラパンはすぐに気がついた。そして、ため息をついた。

キッド、マタドーラ、王ドラをやっちまうなんてな・・・

また、ため息をついた

呆れてものも言えない

ドラえもんは王ドラに聞いている。

ドラパンは王ドラがなんて答えるのか、興味を持ち耳に集中した。

「マタドーラとキッドと一緒に遊んでいたら、一本背負いをされて動けないんです。暫くすれば、治ると思いますから」

とドラえもんは笑顔を浮かべて言い訳をしていた。

全く、王ドラに脅かされるときがある。平然に対応しちまうもんな
少し前までは苦手だったけどな。何考えているのか分からなかった
から

ドラリーニョはそうなんだと納得している。

お気楽でいいものだ。

その隣にいるドラメッドは王ドラのことを心配そうな目で見てい
るようだ。

治療すればすぐに治してやるっといったような感じ

ドラえもんは王ドラにまだ何か言っているようだが、聞こえない煩
くて聞こえなかった。

大方、大丈夫と言っているのだろう

ドラパンはキッドとマタドーラの行動に注意することにした。

王ドラにこれ以上こんな思いをさせないためにも……だ

仲間ドラパンsaid（後書き）

前回のあとがき通りにドラパン視点で書いて見ました。

王ドラ視点とドラパン視点。

見ている部分が違うことで、違った面白さが出てくるから此処がいー！

評価お願いしますね。

流石ドラパン！何でもお見通し

その日からドラパンは王ドラの周りにいることが多かった。

王ドラが家の仕事をしていればドラパンも手伝うし、出かければ一緒にいて行く。それが一週間も続いていた。

お母さんは、全然気になんなかったみたいだけど、僕たちにしてみれば気味悪いことは間違いなかった。

（一体ドラパンどうしちゃったんだろう？）

僕はこっそりとドラパンと追うドラの後をついてみることにした。電柱の後ろからこっそりと二人の様子を除き見ている。周りから見れば、怪しいと思うかもしれない。けれど、僕は気になってしょうがなかった。

二人は店の前まで行くと立ち止まった。ドラパンがくるとこつちを向いた。

気づかれた！？

ドラパンはこつちに向かって歩いてきた。

こつちに来る！？

あせってきた僕は、膝がぐぐくと震えだした

おでこからは汗が吹き出て、背中には冷や汗。こんなに暑くなったのは、初めてだ

ドラパンは僕の前を通り過ぎていった。

なんだ、気づかれてなかったのか・・安心した

それもつかの間

僕の後ろで声が聞こえてきた

「ドラえもん！貴様どういうつもりだ！こっそりと私のあとを付けてきて！」

「ごめん、ドラパン。けど、気になっていたんだよ。ドラパンが王ドラと一緒に行動するなんて」

え

僕は耳を疑った。僕の後ろからドラえもんの声が聞こえてきた。なんと、ドラえもんはのび太と同じことを考えていたらしい。のび太は、見つかることやばいから透明マントを使っていたが、ドラえもんは何も使っていなかった。

だから、ドラえもんが見つかるのは当たり前。

「ドラえもん。お前に訳を話しておいたほうがよさそうだな。なぜ、私が王ドラと一緒にいるかというとな・・・」

ドラパンはこの前あったことを話した。

王ドラがなぜあの時動けなかった真相を

それを聞いたドラえもんは声をあげた

「ええゝー！！王ドラが・・・」

ドラパンはドラえもんになんていったんだろうか？聞こえなかった

「このことは誰にも言うなよ。のび太に聞かれたら、適当にはぐらかしておけ」

「分かった」

どうしてドラパンは僕の名前を出したのだろうか？

僕にはなぜなのか分からなかった。次の瞬間まで・・・

「のび太そこにいるのだろう？姿を隠していても無駄だ。私には分かるのだからな」

気づかれていた。

僕は透明マントを剥ぎ取り、ドラパンの前に姿を現した。

ドラえもんは驚いていたようだが、すぐに表情を元に戻した。

「流石ドラパンだね。なんでも分かっちゃうんだ？」

「当たり前だ。姿を消しても、気配で分かる。のび太、それじゃすぐにでも敵に見つかってしまふぞ！」

ドラパン・・・本当に君ってすごいね。

僕は改めてドラパンの凄さを思い知らされた。

流石ドラパン！！何でもお見通し（後書き）

ドラパン凄ス！！最強だあ！！この分だと、人の心までも読み取っているような気がしてならない！！ドラパンの力思い知ったかー！！！！

作者の一人ごねでした。

こんにちは皆さん。無事更新です！！

ドラパンの一日行動と言う形で構成してみました。

王ドラの名前が出てきたのに本人が登場してないってどういうことー！！それは私のせい。いやー、こういうのもたまに楽しむのも言い方と思ひまして・・・ハハ（笑えないって）一人突っ込みしないで、次回予告しなくちゃいけませんね。

さあて、今回は・・・

まだ考えていません！！ごめんなさい・・・（なんて作者だ！誰かアイデア下さい！！）

メッド「ドラパン・王ドラの話なんて、どうであーる？」

作「いいですね。そういたしましょ！」

そーいう事で、ドラパンと王ドラの話になりましたー！

ドラメッドありがとう！

評価のほう宜しく願いたします！！！！

約束

未だにドラパンと王ドラのことは分らないが、ドラえもんが何かを知っていることは最近知った。

僕は、ドラえもんに聴きだすことにした。

学校から帰ると二階にある自分の部屋に向かった。

たぶん、今の時間ドラえもんがいるはずだ。

「ただいま」

扉を開けて、中に入った。今日は、みんないないみたいだ。

たぶん、ドラパンと王ドラは買い出しに出かけているんだろう。

ドラリーニョとエルマタドーラ、キッドは空き地でサッカーをしに行った。さっき、家から出てくるのを見かけたからきっとそうだろう

ドラメッドとドラニコフは空の旅に行っている。空を見上げたとき、こっちに手を振っているを見た。

ドラえもんは、たぶんデート中。暫くすれば帰ってくるだろう

のび太は、ドラえもんが帰ってくるまでの間、宿題をすることにした
ドラえもんが帰って来たのは、三十分後。のび太も宿題が終わった。

「ただいま、のび太くん」

「お帰り、ドラえもん。ねえ、昨日ドラパンに何教えてもらったの？」

のび太はさりげなく聞いた。

「えーと・・・それは・・・」

ドラえもんはあたふたしている。そう簡単には教えられない。なんせ、王ドラのことだから

「ドラえもん何を話そうとしている？」

扉が開き、ドラパンが部屋に入ってきた。

「ドラパン！」

ドラパンはドラえもんと言うなど威圧している。ドラえもんがいう事が出来ないのを見てのび太はドラパンを見た。そして、ドラパンに聞いた

「ねえ、ドラパン。王ドラのこと何か知っているんでしょ？教えてよ」

「フツ。分かった、教えてやろう。王ドラが横になっていたわけを・・・」

ドラパンはフツと笑いのび太に王ドラのことを告げた。

そして、このことを他のものにいうなと口止めをした。

「分かった、誰にも言わない」

のび太は男と男の約束と誓った。

「ドラパン、気づいていたんですね？私が横になっていたわけを・

」

後ろを振り向けば、王ドラが立っていた。

腑に落ちない顔をしている。泣いてはいないが、知られたくないことだったに違いない

「王ドラ」

階段下からガヤガヤと騒がしい。キッドたちが帰って来たのだろう

でも、一向に止む気配がない。

「僕下に行くてくるね」

のび太は階段を使って下に降りていった。

「のび太くんだけじゃ、不安だから僕も行ってくるね。のび太くん待って」

ドラえもんはのび太の後を追って下に降りていった

ドラパンと王ドラだけが取り残された空間。

立ったまま、時間だけが過ぎていく何分立っただろうか？時間さえも気にしない

（ドラパンがいつも一緒にいてくれたのって私をあの二人から護るためだったんですね？）

お礼を言わないと思います、王ドラが言いかけたその時、ドラパンが口を開けた

「王ドラすまなかった！」

ドラパンは勢いよく頭を下げた。

「え」

王ドラにしてみれば、ドラパンがなぜ謝るのがわからなかった。

ドラパンが謝る姿を誰が予測できただろうか？

王ドラはたじろぐばかり

「ドラパンが悪いわけではありません。私のほうにも責任があるわけですし……。だから、ドラパンが謝る必要はないんです。私がお礼を言わなくちゃいけないんです。ドラパンが私と一緒にいてくれたのは、キッドとマタドローラから護るためだったんでしょ？ありがとうございます。」

王ドラもドラパン同様、お礼を述べ頭を下げた。

王ドラとドラパンが頭を上げようとしたとき、相手の頭にゴツンとぶつかってしまった。

そつ、二人の立ち居地が近かったためだ。

頭を抑えている。

「ごめんなさい・・・」

王ドラは痛みを堪えながらドラパンに謝った

ドラパンはいきなり笑い出した

「あはははは。すまん！王ドラが涙を溜めて、謝るのを見てしまつて・・・ククク」

ドラパンはまだ笑っていた。そのくらい王ドラが可笑しかったのだろつ

「そついえば、いつの間にか下が静かになっていますね？」

「そつだな。行ってみるか」

ドラパンが扉を開けて出た。王ドラもドラパンの後についていくみんな何処にいるのかなと思い、テレビがある部屋に向かった。

案の定、そこにみんないた。ドラえもんズ（王ドラ除く）がいて、静とジャイアン、スネ夫までもがいた。

みんなで真剣にテレビを見ていた。

王ドラは何を見ているんですか？って背中を向けている仲間たちに聞いた。

みんなは背中をびっくりとさせ、王ドラとドラパンのほうを見た。

「なんだあ王ドラとドラパンか。びっくりさせないでよ」

びっくりしたのはこっちだとドラパンは睨んでいた

「で？何を見ていたのだ？」

ドラパンが聞いた

「ニュースだよ。練馬区にやたらと出没している怪盗が現れたって騒がれているんだ。一体誰なんだろうね？」

のび太、お前大丈夫か？とみんなはのび太を見ている。

怪盗はお前の近くにいるだろう？とも

そう怪盗を示しているのはドラパンのことなのだ。ニュースで騒がれているのは紛れもなく怪盗ドラパンである。

約束（後書き）

王ドラ登場！王ドラのことをのび太に教えたドラパン。そして、そのことを王ドラに聞かれてしまった。離れるかと思いきや、くつついた。たぶん、このままいくとドラパンとくつつくと予想されます！
評価お願いします！！

怪盗は誰だ？

練馬区に出没している怪盗ドラパン。でも、それが本当にドラパンなんだろうか？

ドラメッドはドラパンに聴いてみることにした

「ドラパン。お主何も盗んでないだろう？」

「そうだ。此処に着てからは何もしてない。王ドラとずっと一緒に行動していたからな」

そうなのだ。いくらなんでも、王ドラと一緒に怪盗は出来ないのだ。

ドラメッドはみんながいる前でも容赦なくドラパンに質問を投げかけてくる

「偵察しているか？」

「していない」

「此処に着てから何か変わったことは？」

「ない」

ドラメッドはそうかと納得すると、タイムテレビを取り出した

これを使って何をするのかと思いきや、ドラパンの今までの行動を見ることにした。

結果、王ドラと一緒に手を繋いで楽しく買い物をしている姿や、アイスを食べている姿、遊園地に行って動物を見ている姿などを見たが、怪しい行動は一切ひとつもなかった。

ただそれを見たキッドとマタドローは、ドラパンの首を絞めていた。だが、王ドラに止められて出来なかったが・・

無事でよかったね、ドラパン

のび太がそう思ったことは言うまでもない

「じゃあ、誰が盗んでいたんだ？」

キッドが言った。

確かにそうだとマタドローもキッドの横で頷いている。

のび太がテレビを付けた。

すると、ちょうど怪盗のニュース速報が流されていた。

「さっき怪盗が捕まりました。宝石や絵画を盗んでいたのは、小さな猫のようなロボットだったのです」

テレビに映し出されたのは、ドラリーニョのサッカーチーム、ミニドラだった。しかも、全員。

「うわあああ、ミニドラたちだったなんて」

リーニョがテレビに食いついている。ドラえもんはドラリーニョを引き剥がした。

「それにしても、ミニドラたちが犯人だったなんて・・・可哀相」

のび太は、ドラリーニョを見て呟いた。

でも、ミニドラたちはすぐに釈放された。

真犯人には、怪盗キッドだった。ミニドラたちを操っていたらしい

なんと小癪な怪盗なのだろうか

怪盗は誰だ？（後書き）

はい、最後だけと怪盗キッドが出てきました（名前だけ）

いやー、実はミニドラたちはキッドに操られていただけでした。

このほうが終わり方が潔いかと・・・

まあ、実際キッドは警察に捕まっております！！

評価お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1503e/>

ドラえもんズ

2010年10月10日06時10分発行